

---

# カオスエアー

王者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カオスエア―

### 【Nコード】

N6565Z

### 【作者名】

王者

### 【あらすじ】

環境の整ったブレイブ星では人間たちと「ダーク」と呼ばれる怪物が争っていた。人間たちは「カオスエア―」を武器として使い、ダークたちを撃退してきたが、ある時、それは崩れた。ブレイブ星人の唯一の望みである「カオス」と全てを作り出す闇「ダークゴット」をめぐる戦いが始まる

## 雨の中の違和感

カオスエア― おそらくここ、「ブレイブ星」にしかない。カオスエア―は俺たち「カオスの使者」の重要な物質として今まで扱われてきた。カオス使いにしか扱う事はできず、その多くの目的は武器だ。そのまま操って空気の弾「エアロ」としても使えるが、剣や斧などの武器と併用することもできる。カオスエア―が当たったら通常の間人や動物は勿論、即死するが、カオスの使者と「ダーク」は違う。俺たちブレイブ星の敵、ダークたちは俺が生まれたころ、つまり19年前から現れ始めた。そう、今、俺たちの星はダークたちによって全滅の危機に晒されているのである

太陽の大半が沈んだ頃、ここ、ロウソク城の明かりが点いた。今、この俺、カオウ・アースは城の警備をやらされている。俺は愛用の武器、「ガンステッキ」を片手に廃墟となった町に目を光らせていた。町は1か月前に壊滅し、残った約500人の市民は城に保護されている。その市民たちをダークたちから守るのがカオスメンバ―の仕事だ。

ようやく、太陽が完全に沈んだ頃、交代の時間となった。槍を一本持った男と剣を二本、腰に挟んだ男が代った。これで俺と警備を共にした男は真夜中まで自由に時間を使える。

俺は息をふーと吐きだし、男に話しかけた。

「やっと終わったな…：ていうかダークたちは真夜中にしか来ないのにわざわざ昼間見張る必要があるのか？ザウアーはどう思う？」  
ザウアー・バンパイアは俺と同じ年で共に町で育ってきた仲だ。俺たちは揃ってカオス使いの才能があると言われ、カオス使いになった。といってもまだ1か月しか働いていないが。

ザウアーが真面目に答えた。

「念のためだと思う。極たまにだけど狼の群れとか他の町の盗賊も

来ることだし。そんなことより早く何か食べよう」

と少し長めの茶髪を触りながら言う。これは奴の癖だ。

「ああ、そうだな。俺も腹が減った。その前に武器の整理をするから先に行つてくれ」

俺はそういい、自分の部屋に走った。

部屋に入つてすぐ、俺は腰に挟んでいた一本の鋭い剣と刃がギザギザのナイフを壁のフックにかけた。こんな重い物をわざわざ城内までつけておく必要はない。ガンステッキのみを手に持ち、俺は部屋を出た。食間に着くとすでにザウアーは食事を始めていた。ザウアーの向い側のイスが空いていたのでひとまず、ガンステッキを置いた。俺はすぐさま食事を取りに言った。料理は住民の女性たちが作り、食料調達は住民の男性の狩人やカオス使いが行っている。料理の豪華さは当然、市民の方が高い。が、カオス使いに出される料理も決してまずいわけではないし、この辺りは肉も果物も豊富にあるため食べ物には困っていない。好きなだけ食べられるのだ。

俺は山盛りになった料理を落とさないよう、取っておいた席に置いた。と同時に肉汁が跳ね、ザウアーの目にヒットした。ぎゃあ、と悲鳴を上げる。続いて喉に食べ物が詰まったのか、咳き込んだ。

ザウアーが呻きながら言う。

「気を付けてくれよ。ケルベロスの脂は毒薬の材料にもなるんだから」

もちろん嘘だ。俺は食用の土で作ったパンとケルベロスの肉を頬張りながらうん、と2回頷いた。ザウアーは目に付いた肉汁を布で落とすと一つの紙を取り出した。どうやらダークたちに関係がある物らしい。

「これを見てくれ」

「んぐつ？」

俺は治癒力を高めるといふドレインハーブを食べる手を止め、ザウアーの話聞いた。

「カオス使いに強さと地位を表わす、名称があるのは知っているよ

な？」

「もちろん。それくらい知らないとかオス使いにはなれないからな。カオスナイト、ソルジャー、マスター、バスター、リーダーだろ？それがどうかしたのか？」

ザウアーが得意げに言った。奴は情報を収集するのが得意でしかも頭もいい。俺にはそんなとりえはないし、せいぜい剣術の強さとカオスソルジャーの中で強いことくらいだ。

「ダークたちにも同じものがあるんだ」

「は？なぜ？奴らは動物ばかりで知能がほとんどないから無理じゃないのか？」

ここで初めてザウアーが不安げな表情を見せた。が、あまり間を開けず続ける。

「最前列で戦うバスターたちによると高い知能を持ったダークが現れたそうだ。現に最近、奴らは北門だけではなく、東西南の門からも襲ってくる。ダークたちは弱い順からダークハンド、ボディ、ソウルと言っらしい」

「……いよいよやばくなって来たな、この城、いやブレイブ星が。早く「カオス」が復活してくれるといいのだが」

「カオス」とは伝説とされる古代の救世主だ。カオスはその昔、ダークたちの源、ダークゴットと相打ちになり、カオスエアーを残したとされている。まさに今も昔も救世主だ。

食事が終わってすぐ、俺はまた部屋に戻り、真夜中の戦いに備えて準備をした。真夜中はダークたちが必ずと言っていいほど襲ってくる。今までの犠牲者は20歳以下がほとんどで8人が犠牲になっている。まず、武器の手入れをした。さつき食事前に置いた鎧竜の鱗でできた剣とナイフを研ぐ。ガンステッキはいくら使ってもなぜか切れ味が変わらないため、汚れのみ、落とした。念のため、ガンステッキの銃弾も用意しておく。この銃弾も鎧竜の鱗でできている。強いダークはカオスエアーを使わないと倒せないが、弱いならこれでも十分倒せる。まあ、ほとんど剣で守備することになるのだが。

真夜中　　熟睡していた俺は雨の音と一人の女性の声で目を覚ました。女性が戦い前の軽い腹ごしらえにとチキンダッシュという鳥の骨付き肉を渡してくれた。俺は背伸びをしてから用意した剣を腰のヘビベルトに挟み、骨付き肉に噛り付いた。

「いつもすまない、ガーナ」

「いえいえ。私も起こされるときはありますし。気にしないで下さい」

と目をこすりながら言った。俺と同じくかなり眠いらしい。それにしてもいい新人がいるものだ。ガーナ・ベレッタはつい最近、一週間前にカオス使いの一員となった新人だ。新人といっても決して足手まといにならないし、それどころか、活躍が多い。潜在能力でもあるのだろうか？

骨付き肉を食べ終わり、すぐさまガーナと共に城の屋外に向かった。俺とガーナは北門を守備することになっている。廊下はカオスメンバーであふれかえっていた。俺たちと同じ地位のものもいれば重装のバスターもいる。いつもと変わらない光景だが、住民たちはまたざわめいていた。慣れることができず不安なのだろう。不安を抑えきれないのは俺たちも同じだった。

屋外は大粒の雨が降っていた。俺たちにとって雨は最高の武器になっている。振って来る雨をカオスエアで包めば猛毒として使え、一度に大勢のダークを倒せるからだ。今日は多く睡眠がとれることだろう。城壁に一番近い最前列のメンバーたちがざわめき始めた。ダークたちが近づいて来ているらしい。俺は鎧竜の剣をベルトから引き抜き、警戒を高めた。ガーナは長さ30cmほどの短剣を二本構えている。その後ろではザウアーが短めの槍を構えて敵を待っていた。他にも約30人のカオスメンバーが警戒している。

その時、最前列のメンバーたちが声を上げ、飛び掛かって来たダークを剣で切りつけた。いよいよ戦闘開始だ！最前列のメンバーたちが懸命に戦っているが、奴らの侵入は防げない。戦闘が開始してか

ら1分も立たないうちに20体ほどのダークが後列の俺たちを襲ってきた。俺は狼の容姿をしたダーク2体の懐を剣で切り裂いた。2体が吹っ飛ぶ。しかし奴らは倒れず、再び襲いかかって来た。が、俺は同様せず、1体の腹を剣で切り裂き、もう1体をエアロで仕留めた。さあ、次の相手はどいつだ？

突然、悲鳴が上がった。俺たちの方ではない。最前列からだ。雨でダークを撃退しながら悲鳴の原因を確かめる。バスターが一人倒れていた。そのバスターを倒したダークがこっちに突っ込んで来る。驚くほどでかい。容姿は猪と似ている。あれがザウアーの行っていたダークボディか？

周りのメンバーがダークボディの猪に雨で集中攻撃を始めた。俺も近くのダークを見計らいながら応戦した。が、猪は怯まず、数人のメンバーに体当たりした。メンバーが壁に激突し、グシャ、という嫌な音がする。ものすごい怪力だ。一瞬にして数人のメンバーが死んでしまった。このダークボディを何とかしないと全員やられる。数人で飛び掛かって仕留めるしかない。

そのことに気が付いたのか、ガーナがダークボディに飛び掛かり、短剣で胴体を切りつけた。続いてザウアーが槍で同じく胴体を突くが、ダメだ。胴体はほとんど効果がない。次の瞬間、ダークボディが怒りをあらわにし、ザウアーを足で蹴り飛ばした。さっき程の威力ではないが、危険なことに変わりない。

俺はやつとのことので周りの目障りなダークたちをすり抜け、ダークボディに近づけた。奴より早く動き、剣で鼻を切り落とした。ダークボディが絶叫する。それを見てガーナが片方の短剣で奴の脳天を貫き、仕留めた。俺は再び剣にカオスエアを宿し、次なる敵を待った。

剣を振り、エアロを放ち、雨を奴らに落とし続けて何分経っただろうか？そろそろダークたちが引き上げてもおかしくない。だが、なぜか奴らの勢いは一向にやむ気配がない。まずい、体力が限界だ！死に物狂いで雨で攻撃しながらふと空のあるものに目が留まった。

あれは：人？いや、人が宙に浮けるわけない。あれはダークだろう。人型は初めて見る。しかしなぜ攻撃して来ないのだ？

人型のダークが徐々に降下している。いよいよ攻撃して来るのか？俺はカオスエアーを操っていない片方の手で剣を構えたが、奴は攻撃して来ない。人型のダークが姿が見える位置まで降下してきた。不気味なくらいはつきり見える。他のダークたちと同じ暗闇だが、人に驚くほど似ている。ふいにそのダークが不敵に笑った。背筋が凍る。なぜだ？恐怖からか？

気が付くとそいつは消え、戦闘も終わっていた。あれほど雲があったにも関わらず、雨も止んでいる。俺はガーナとザウアーに話しかけられ、我に返った。戦闘を無事切り抜けられて嬉しいはずなのに、なぜか気持ちに乗らない。疲れているのか？俺はベルトに剣を挟み、ガーナ、ザウアーと共に途中まで歩くことにした。その間もあのダークのことが頭から離れなかった。あいつはいったい何者なのだろう？

この時まさか、あのダークが強大な災いになるとは思いもしなかった。

## レイン

突然、ロウソク城が黒い炎に包まれた。城中騒ぎだす。直後、数えきれないほどのダークたちがいつせいに城を飲み込んだ。カオスマンバーたちの必死の抵抗も無数のダークたちには無力に等しかった。次々と響き渡る悲鳴……その光景を奴はダークたちの最後で見ていた。俺に見せた不敵な笑みを浮かべて……

気が付くとその光景は俺の視界から消えていた。汚れた城壁、ケルベロスの脂を固めて作ったロウソク……いつもの風景が広がっている。額と体にかけて毛皮は汗でびしょ濡れだ。あれは夢だったのか……それにしても皆がダークたちに殺されてしまっなんてひどい悪夢だ。俺は額の汗を拭いつつ、体を起こした。夢見が悪いからと言っついでつまでも寝ているわけにはいかない。後一時間くらい経てば担当の警備が始まるし、早く食事を済ませないと。昼間とはいえ、何も無いとは限らない。俺はガンステッキといつもの装備を持ち、食間に向かった。

食事はあまり進まなかった。いつもの半分の量すら食べれない。夢のせいか？ たかが夢。現実で起こるなんてない……いくらそう思っても「予知夢」という言葉は消えなかった。ああ、頭が痛い……頭を抱え、うんうん唸っている。突然、誰かに話しかけられた。男の声だ。この声は俺が一番よく知っている。

「カオウ、どうした？ 珍しく頭なんか抱えて」

俺は少し笑いながら答えた。本当はもつと喜びたいが、この気持ちでは無理だ。

「兄さん……！ 久しぶりじゃないか」

テラ・アースは俺の実の兄だ。歳は三つ離れている。カオスマンバーの位も俺とは桁違いのカオスリーダーで多忙のため、会うことは

ほとんどない。

「ああ、一週間くらい会ってなかったな。たまたま手が空いたからこれをお前に渡そうと思って」  
と言って一つの服を差しだしてくれた。

「そいつはお前たちナイトとソルジャーが着ている服より戦いに優れている。鎧竜の鱗とメタルゴムヘビの毛皮で出来ているから軽し、驚くほど頑丈だ。『グレートジャケット』と名称もついている。それよりどうしたんだ？」

俺はありがとう、と一言いい、夢のことを話した。

すると兄さんは笑って答えた。

「夢なんて気にするな。俺たちは滅びたりしない。カオスが救ってくれるさ」

俺は立ち上がり、料理の隣に置いておいた砂時計を見た。砂が残り少ない。もうすぐ警備が始まる。

俺が兄さんに別れを告げて立ち去ろうとしたその時だった。屋外へと繋がる扉が勢いよく開き、カオスマンバーの一人が兄さんの名を慌ただしく呼ぶ。そしてこちらまで走ってきて兄さんの話始めた。

「リーダー、大変です！」

「何が大変がよくわからないがとにかく行ってみよう」

兄さんがカオスマンバーの後に続いて走りだした。どうせ俺も屋外に行くため後を追った。

屋外はまさに異常事態そのものだった。昼になったばかりなのに視界が真っ暗でほとんど見えない。俺は持っていたロウソクに火を灯しつつ、空を見上げた。不気味な黒い雲で覆われている。それも雨雲とは似ても似つかないほど黒い。黒い雲は廃墟となった町の方まで続いていた。この雲は…夢で見た炎と似ている。一体、何が起きているのだ？

門の方の城壁はたいまつを持ったカオスマンバーで溢れ返っていた。これだけ暗いとダークたちが攻めてくる可能性がある。もし、今襲

つて来たら昼に初めての戦いになる。同時にこれから先、日中もダークの恐怖に怯えることになる。願わくばダークが現れないことを祈るのみだ。

兄さんと呼んだカオスマンバーが兄さんと俺にたいまつを渡し、門の方へと誘導した。あれは俺が警備するはずの北門だ。俺はグレートジャケットを着用して共に警戒をした。北門にはザウアーとガーナの姿も見える。現れた俺に気付き、二人が話しかけてきた。

「カオウさん、あの雲は一体？」

俺は首を横に振ってさっぱりだ、という顔をした。するとザウアーがぼそりと何かを言った。なぜかその顔は恐怖で強張り、汗で濡れている。

「俺、あの黒い雲が何だか、聞いたことがある……」

「何だ、知っているのか。さすがだな。で、あれは何なんだ？まさかただの悪天候なんて言わないよな？」

冗談半分に言っていたその時だった。突然、大粒の雨が降り出した。勢いは昨日と同じくらいで特に変わりはない。たいまつがいつせいに消え、明かりが途絶えた。しかしクリスタルのランプがあるため、明かりの心配はない。俺は口ウソクに再び火をつけ、クリスタルのランプに入れた。これで明かりを確保できる。途端に全員の気持ちは緩んだ。ただの雨だった、心配ない、昼の雨降りなら襲って来ないだろうと

突然、兄さんが叫びだした。城内に入ろうとする列の先頭に立ち、上空から見た城の中心を指差している。その方向に全員の視線が集まった。確認しながら武器を構えている者までいる。俺も念のため、剣を構えておいた。もしかしたらダークかもしれない。

指差した方向の空の雲が晴れ、青空が見えた。が、すぐに青空は別の何かに覆われた。黒い雲ではなく、何かの渦だ。夢の炎や雲と同じく、驚くほど黒い。その渦から同じ色の点が次々と落ちる。暗くてよく見えない。雨か何かだろうか？皆、その点に戸惑っていた。点が落ちて間もなく、城内から悲鳴が上がった。住民の悲鳴だ。皆、

我に返り、その内の二人が駆け込んでいった。直後、住民の悲鳴に混じって二人の悲鳴が響く。同時に城内の扉が倒され、そこから約20体ほどのダークが飛び出してきた！この光景は…夢と同じだ…！最前列のカオスマンバーたちが一瞬で飛び出してきたダークを仕留め、全員が城内へと入る。俺はザウアー、ガーナと合流し、通路を進んだ。

通路もすでにダークたちに侵入されていた。その中心に夫婦と思われる住民がいた。二人とも非常用の大きな盾で必死に攻撃を防いでいる。俺たちは邪魔なダークたちを蹴散らし、夫婦の元へ急いだ。その中に一際、巨大な影が見える。昨日、倒した猪と同じく、ダークボデイか！容姿は猪ではなく、熊に似ている。

俺は手早く、ダークボデイの二本の後ろ足を切断し、夫婦の元にたどり着いた。立てなくなつたダークボデイの頭にザウアーが槍を突き刺し、仕留めた。俺が夫婦を守って逃げる間、周りの敵はザウアーとガーナが防ぐ。ようやく安全な場所へたどり着くと女性が突然俺たちに頼んできた。

「お願いです！娘を助けてください！逸れてしまつたんです！」

「特徴は？」

そう聞くと女性は黒石で書いた似顔絵を渡してきた。俺はすぐさま受け取り、ポケットにしまった。とその時、扉が突然開き、何か飛び込んできた。ダークではない。男のカオスマンバーだ。見たところ位はバスターと思える。男は息を切らしながら言った。

「お前たち、この城はもうおしまいだ。城外へ逃げて、他の町の城に縋るしかない。城外の通路は分かるはずだ。さあ、早く行くぞ」通路の位置は俺でもわかる。城の北西、武具庫の壁の裏に隠してあるらしい。すぐにでも生きたいところだが、この夫婦の俺たち三人の内、一人が助けなければならぬ。もちろん、行くのは俺だ。

俺は意を決してバスターの男に言った。

「夫婦をそしてガーナとザウアーを頼む。俺はこの夫婦の娘を助け

なければならぬ」

「生きてるかどうか、分からないのか？」

ここでザウアーが口を挟んだ。

「俺も行く。一人じゃ危ないだろう？」

「いや、十分だ。この夫婦はお前とガーナで守れる。俺はこの男と行く」

予想通り、男が大声を上げ、反対した。しかし絶対反対、という顔ではない。

「勝手に決めるな！俺は行かない！」

俺は半分笑いながら男に言った。

「勝手に決めたから行かないんだろう？じゃああんたより格下である俺が頼むならどうだ？」

「…アルキス・ベリーだ」

わざとはっ、という表情をしていると男はついに本心を言った。

「共に行動するんだ。何かあった時、名前がわからなきゃ、呼べないだろ」

ザウアーたちと別れた後、俺たちはまず瓦礫の山に向かった。そこは物置庫だったが、今は崩れ、瓦礫の山になっていて子供たちの遊び場になっている。アルキスによると一番いる可能性が高い場所らしい。夫婦にもらった似顔絵を見せるとアルキスは瓦礫の山でその子をよく見かけたそうだ。

奴の戦闘能力はバスターだけあってすさまじい。俺より歳が5歳上なだけあって剣術は比べ物にならない。アルキスは通路で出くわした数体のダークを全て一人で片づけてしまった。俺が手を出す暇もないほど速いスピードだ。剣術だけではなく、体力もありすぎる。何とかアルキスに追いついた時にはすでに瓦礫の山に着いていた。止まって息を整えようとしたが、そんな暇はなかった。瓦礫の山の頂上に一人の少女が立っている。あの子が夫婦の子供だろう。その少女に危険が迫っていた。すぐ近くに10体ものダークがいるのだ

！その内、一匹は少女とほとんど距離がない。アキレスが必死に瓦礫の山を登っているが、他のダークに邪魔されている。俺が応戦しても間に合わないだろう。こうなったら飛び道具を使うしかなさそう  
うだ。

俺は急いでガンステッキに引金付きの弾倉を取り付けた。すぐさまダークに狙いを定める。ダークは少女に飛び掛かる寸前だ！一か八か引金を引いた。

弾丸は見事に命中し、ダークを仕留めた。と同時にアキレスが瓦礫の山を登り切り、少女に駆け寄る。俺は二人を守るべく、瓦礫の山にまだ残っているダークたちを剣でなぎ倒した。開いた道をアキレスが少女を連れ、滑り降りてきた。少女に話しかけつつ、お互いを褒め合った。

「やるな、カオウ。俺にはそんな正確に銃を扱えないぞ」

「偶然さ。銃というより運の扱いが良かったんだな。にしてもアキレスの剣術には敵わないよ。それより早くこの子を城外へ連れて行かないと」

そういうとアキレスが少女に話しかけた。

「お前、なんて名だ？」

「…エファです」

「敬語を使うとは偉いな。見た目ほど幼くはなさそうだ。足手まといにはならないな」

見た目は確かに幼い。髪はセミロングで服装はワンピースを着ている。身長はそれほど高くない。俺は雑談しているアキレスに言った。「おいおい、雑談はあとにしよう。早く逃げないとまずいと言ったのはアキレスじゃないか」

「そうだな。逃げるのが先決だ。俺がこの子を連れて行く。カオウはダークたちを…」

突然、言葉が止まった。むせたのか？いや、違う。何かがいるのか？周りを見渡したが、ダーク一匹すらいない。俺はアキレスの目の先を追っていった。目線の先は天井が抜けていて空が見える。そこ

には屋外で見た点が見えた。しかし明らかに形が違う。あれは…人型のダークだ！

と次の瞬間、天井が一気に吹っ飛んだ。さらに瓦礫の山が増える。間一髪、俺たち三人は落ちてくる瓦礫をかわした。俺はすぐさま立ち上がって剣を構え、警戒した。アキレスも我に返ったようでエフアを背後に剣を構える。ぽっかりと空いた天井から空を見上げ、さっきのダークを確認した。奴の姿はない。黒い雲と雨しか見えない。その時だった。突然、俺たちの視界に人影が現れた。さつき宙に浮いていた人型のダークに間違いない。しかも俺が昨日見た奴と同じだ。途端に体が強張る。バスターであるアキレスも同じだった。緊張が張り詰める中、俺は目の前の化け物の姿をゆっくりと確認した。体系は間違いなく人で顔は俺に見せた不敵な表情のまま変わっていない。手と足は指がなく、丸い。まるで手は手袋と足は靴と一体化したかのようだ。全身からすさまじい闇を感じる。そのダークは突然、俺に話しかけた。

「二度も会うとは奇遇だな。お前と私は何かしらの運命があるのかもしれぬ」

ダークが喋るなんて…人型だから知能も高いのだろう。これは…油断できない。

俺はゆっくりと口を開いた。

「お前だな？あの雲と渦を作ってダークたちを城に降らせたのは」「よくわかったな。そう、あれは私が作ったものだ。他のダークには作れぬ。ダークゴット様の分身である私だからこそできたのだ」  
続いてアキレスが質問を投げかけた。どうやら奴も知能があることを悟ったらしい。

「お前、一体、何者なんだ？」

「私はレイン。今言ったようにダークの源、ダークゴット様の分身だ」

次はまた俺が問いかけた。今は攻撃せず、様子を見た方がいいだろう

う。

「ダークゴット？それよりなぜ、今まで今日と同じことをしなかったんだ？」

するとレインは笑いながら言った。不気味すぎる。これはまずい状況なんじゃ…？

「ある星で行っている計画が進んだからだ。もうすぐダークゴット様が甦り、その星にもダークたちを留まらせられる。その星は無論カオスエアーなど使っていない。全宇宙を支配するにはこの星の間、特にこの城の人間が邪魔になる。あとの城の人間は適当にダークを送り込めば滅ぼせる」

「ほう、じゃあ俺たちが何を言っても無駄なわけか」

これはアキレスだ。その瞬間、アキレスが剣を構え、レインに向かっていった。俺はとっさにエファアをかばう。アキレスがレインを倒すことを祈っていた。

だが、数秒後、アキレスはふっ飛ばされ、戻ってきた。石造りの壁に激突し、口から血を吐く。アキレスは呻いて立てない。

そんな俺たちを見てレインはついに攻撃宣言を出した。

「哀れな…私に出くわしたばかりにお前たちの運命の道はここで途絶えてしまう…だが、心配はいらん。一瞬で片づけてやる」

レインの体に変化していき、次第に6本の腕が突き出た。どれも真っ黒な刃に変わっている。バスターであるアキレスは動けない、少女であるエファアを守らなければならない…この状況で俺は一体、どう戦えばいいのだ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6565z/>

---

カオスエアー

2011年12月26日01時48分発行